

過去を悔やまず、未来を 思い悩まず、いまを生きる。

松山教会 八尾江理佐さん

八尾江理佐さんは、平成25年暮れに、大腸の一部・S字結腸にがんの病巣があり、リンパ節、肺、肝臓にも転移していて、治療をしなければ余命は3ヵ月から6ヵ月と告げられた。その直後は不思議と落ち着いていたが、4人の息子たちの不憫さを思うと悲しみに押しつぶされそうになった。だが、まわりには家族を始め、がんに立ち向かう勇気を奮い立たせてくれる仲間がいて、自分は生かされていることに気づく。そして、支えてくれる人への感謝はもとより、注射針が血管に入ってくれること、薬がからだをめぐってくれること、すべてに感謝を思い、「ありがとう」と口にだすことに努めた。いつしか宣告された余命を超えたが、いまもつらいがん治療は続いている。しかし、江理佐さんは「変えられない過去を悔やまず、まだ見ぬ未来を思い悩まず、いまを生きる」と覚悟している。それは、仏さまからのいただきものだと思っているからだ。



祈りの先に……

古い川柳に「神仏に手前勝手申し上げ」とあるくらい、人はいつの時代も、神さまや仏さまに願いをかなえてほしいと祈ってきたようです。

室町時代の坂土^{さかし}仏^{ぶつ}という医師は、伊勢神宮への参拝にあたって、「心は祈るところのない内清^{うちじやう}淨^{じやう}で、身はけがれのない外清^{そと}淨^{じやう}であれば、神の心と吾^わが心に隔^{へだ}てがなくなる。神と同じであるならば、何を望んで請^こい祈^{いの}ることがあろうか。これが真実の参^ま宮^{みやう}と受け給^{たま}わると書き残^{のこ}しています。神仏への祈願^{きがん}を当たり前のよう^{しんどう}に受けとめがちな私たちですが、仏教にしても神道にしても、信仰の本質は祈ることを必要としないところにあるということでしょう。

一方で、「祈り」とは、いのちの最も奥深くから催^{もよお}してくるものといわれます。祈るという文字には「声をあげて神に福を求めめる」という意義もあるようです。ですから、苦しい状況のなかで、「なんとか助けてほしい」と切実に願う人の祈りを、むげに切り捨てることができないと思います。

ただ、私たちは祈願の先にある大事なことを、つねに忘れてはならないと思います。その大事なことは、「生老病死は人生につきものである。だからこそいま生きていることの有り難さに気づいてほしい」という仏の願いです。お願い参りも祈りも、仏さまが「大切なことに気づくように」と願って与えてくださった契機です。そのことをかみしめて、神仏と向き合ってみてはいかがでしょうか。

立正佼成会